

教育福祉常任委員会視察報告書

日時 平成 30 年 7 月 12 日（木）13 時 30 分～16 時 00 分

場所 埼玉県宮代町議会室・笠原小学校

参加者

二宮町・・・教育福祉常任委員（前田委員長、一石副委員長、小笠原議員、添田議員、根岸議員、渡辺議員、露木）、総務建設経済常任委員（桑原議員、善波議員、二見議員、二宮議員、野地議員、柳川議員）、戸丸事務局長、小笠原教育総務課長
宮代町・・・学校管理幹兼副課長：小山氏、指導主事：竹内氏

報告書作成担当：露木

目的

宮代町は、子どもたちの教育を大切にしてきた歴史があり、それは昭和 56 年に開校した町立笠原小学校の設計やコンセプト（「学校はまち」「教室はすまい」「学校は思い出」）からもわかる。重点的に教育施策に力を注いできた宮代町の小中一貫教育推進や、学校の適正配置、学区選択制、英語教育等を学び、二宮町の学校再配置や教育について考える一助とする。

概要

歓迎挨拶、訪問挨拶ののち、二宮町から送った質問事項に対し、説明を受ける。小中一貫や学区編成については口頭で。英語教育についてはプロジェクターでの説明と、授業の様子を動画で視聴。終了後、笠原小学校で現地視察。

【小中一貫教育推進の背景と成果について】

宮代町の小中一貫教育推進委員会は、各中学校区で取り組み、公募による町民 3 名、各校長 7 名、保護者代表の 7 名で、年 2 回開催。意見交換を行ってきた。

平成 15 年に小中一貫教育が始まり、今年で 16 年目。小学校 4 校、中学校 3 校のうち、同じ敷地内にある小・中学校をモデル校にしてスタート。その後、他の小学校に導入される。

教職員においては、小・中 9 年の一貫したカリキュラムの実践、児童には丁寧な授業、生徒には専門性を高めた授業を意識し、教育活動・指導方法の相互理解を深めるための授業参観などを行い、夏季休業期間に小・中の先生による合同研究会での学び合い等を行っている。

児童・生徒の交流として、例えば、体育祭や合唱コンクール、陸上大会等がある。小学校での陸上大会に中学生が訪問し、競技のアドバイスをしたり、夏休みの補習に中学生がボランティアで小学生に教えるなどで交流が行われている。それにより、小学生にと

っては、中学校入学への不安の解消や、期待感への向上につながり、中1ギャップが解消されている。中学生にとっては、自己効力感や自己肯定感が高まっている。

平成24、25年はモデル事業の委嘱を受け、小中一貫教育の見直しをした。児童生徒の落ち着きのある生活、意欲的な態度からは、小中一貫教育が根付いていると感じているが、一人ひとりに確かな学力を身につけさせるのも一貫教育の狙いであり、合同研修会では、小学校で確実に身につけてほしい部分（例えば分数の計算など、中学に入る前に理解していないとその先が大変になってしまうもの）は、小中で連携して、中学ですぐつまずくことがないようにしている。それらは、学力調査などの分析をもとに、各学校で課題抽出し、学力向上のために取り組んでいる。

【宮代町小中学校の適正配置および通学区域の編成等に関する審議会の構成、運営、および合意形成の手法について・学区選択制について】

平成24年12月、小中学校の適正配置の審議会を設置。PTAから7名、地区から4名、小中から学校長が各1名。有識見者3名、公募3名の合計19名。平成26年に答申があり、地域説明会を何度か実施。地元の中中学校がなくなるかも、という話になると、今まで聞こえてこなかった声が聞こえるようになったり、長寿命化をすればまだ先送りできるのではないかという話も出たり、義務教育学校の仕組みで課題を乗り切れるのではないかという意見もあった。

現在は、小学校4校、中学3校の現状維持。児童数は増加の傾向もあるが、文科省は8～12学級ないと部活が成り立たなくなると言っており、週5日の常勤の先生を置けなくなる等の懸念もあって、中学校は1校、小学校は3校がのぞましいのではないかと議論されている。

また子どもたちが学校を選択するのも権利であると考え、15年ほど前から学校選択制を導入。小・中学に入学するときに、通学区以外を選択でき、原則的には途中での選択・変更はなし。学区外への希望者は当初は数名だったが、現在では小学校が40名程度。中学校は10名弱。それぞれ特色ある教育を進めているが、ほぼ笠原小学校への希望者である。動物園周辺地区が新興住宅地にもなっており、ホームページなどを見た上で、教育方針や裸足で過ごす学校であるなどの特色に魅力を感じ、希望が多い。ただ各校それほど児童・生徒数に差がないのは、それぞれの地区に駅があり、昔から人が住んでいる地区や、新興住宅地など、バランスが取れているため。

【英語教育について（笠原小学校・・・研究校）】

プロジェクター資料での説明と実際の授業の様子を撮影した動画を視聴

◇平成19～21年度

文部科学省の指定を受け「小学校における英語活動等国際理解活動推進プラン」の拠

点校（小学校 2 校）となり、小学校における英語活動の推進教材開発に取り組んだ。

◇平成 26～29 年度

文部科学省の指定を受け「外国語教育強化地域拠点事業」の拠点校（中学校 1 校、小学校 2 校）となり小学校における英語教育の研究開発や、平成 32 年度からの小学校英語課授業に向け、可能なこと、不可能なことを研究。

◇平成 30～31 年度

文部科学省の指定を受け「教育課程特例校」として 4 小学校で、3・4 年生が外国語活動を週に 1 時間、5・6 年生が外国語科を週に 2 時間行っている。

・指導体制

英語教育における指導体制は、担任が各学級に 1 名、英語専科教員が小学校担当 1 名、JTE が小学校担当 3 名（各校へ週 2 日ずつ）、ALT が小学校担当 2 名（2 校に 1 名）、中学校担当が各校 1 名いる。

・授業改革

児童の声、思いを聞き、「聞かせずに言わせる活動」から「聞く→話せる」という活動へ。教員を対象とした研修も行い、発言（アウトプット）を急かさず、聞くこと（インプット）を繰り返す取り組みを行った結果、自然と児童たちが言葉を発する（アウトプット）ように。児童たちは自己評価カードも活用している。繰り返し聞かせること以外で、具体的に必ず行っているのは、子どもたち同士でペアになり、挨拶後のやりとり（話したいことを話す）や、練習した単語をビンゴシートに書いてきて、先生がそれを言うなど。それは帯活動（毎回決まったことを決まった時間にすること）という。

・成果

児童は、コミュニケーションへの関心・意欲が高まり、英語を英語で理解しようとする態度が向上した。また活動を習慣化することにより、即興的に話せるようになった。児童英検は好成績で、文部科学省の全国英語力調査では、中学 3 年生で英検 3 級程以上の英語力がある生徒の割合が、51.5%となり、これは全国第 2 位の東京都 51.6%に次ぐ結果となっている。ちなみに全国平均は 40.7%。

・質疑の中で出た話。

※ 小学校では文法は教えていないが、センテンスとして言葉の塊（チャンク）を入れているので、あえて文法を意識していないが、あとから文法を見たときに、チャンクが実は文法的に正しい集まりだったということがわかる。

※ 動画の中では 3 人の先生がいたが、英語専科教員、日本語英語教員、ALT、担任で、最大 4 名で授業を行う。小学校では児童に同じことを何度も聞かせてイ

ンプットすることが中心なので、担任でも十分対応できるし、子どもはそれと同じように繰り返せばいい。中学は英語の教科担任と ALT が中心となる。

※ 先生たちには授業の準備に負担をかけさせないように意識している。教材を揃えるということではなく、教室の中にある色や、友人のこと等で会話するのが自然である。ときどき写真を見せたりする程度の準備。

※ 文科省の掲げる授業のやり方は「A→B、A→B、A→B」という、聞く→答える、聞く→答える、というもの。その通り行ってきたが、本当に英語に力がつくのか疑問であった。指定校を受けたタイミングや、たまたま小山氏が神奈川の鎌倉在住の東京学芸大のほそやきょうこ先生の研修を受けたことも重なり、今までにないやり方で研究し、成果を出し、今に至る。

※ 英語と日本語を繋げることに尽力した、宮代町の偉人、英文学者の島村盛助のように、英語に特別な想いを持って学んでいきたいと思いますというイベントがある。授業の一環で行っている。

【現地視察・・・笠原小学校】



宿泊施設（ヴィラ）のよう。各教室の前に下駄箱があり、2階建てのため、教室と校庭の距離が物理的・精神的に近い。



各教室の廊下（屋外）に飛び出たスペースは、二人がけのベンチが向き合って3区画（12人分）設置されている。



廊下の校庭側には向き合える小さなベンチ。秘密の話、喧嘩の後の仲直りなど、利用する場面を想像する素敵な空間。



教室の奥のスペースはこあがりになっている。落ち着ける空間。



1階の廊下。裸足が気持ち良い感触の床。遊び心のある柱の文字。



2階の廊下からみた校庭。無機質な通常の学校の校庭とは真逆の雰囲気。



【まとめ】

学区再編成の進捗状況や、小中一貫については想定の域を出るものではなかったが、現地視察した笠原小学校のような特色のある学校は人気があり、学区選択制で希望者が多いのもうなずける。37年前に設計されたとは思えない「子どもの好奇心をかりたて、豊かな心をはぐくみ、住まいのような落ち着きと学び舎として素晴らしい環境」の小学校だった。ソフトとハードの両面で、子どもたちの教育を見ていかなければならないことを痛感。英語教育については、私たちが思っていた以上に熱心に研究をされており、国のモデル校指定を受けることや研究校になることも重要だが、それ以上に「これで本当に良いのか」という、現状からの脱却、向上心がある先生たちの想いも非常に重要であると感じた。やはり「人」の力は何より大きい。